

け、それを求めて、日々新たにしていって、日々新たな世界を創造しつつ生活することを流行と名づけた。つまり時代の移り変わりに影響されず、安定した恒常性が不易であり、その時その時における新しみを創造してゆくことが流行である。瞬間瞬間の新しきは、即消えてゆくもので永遠性をもたない。永遠性を含む不易であって、永遠性に連なる流行でなくてはならない。不易と流行は、一見矛盾しているようにみえるが、俳諧文芸の本質を静と動の異なった視点から見ていることに他ならない。

しかし「芭蕉の俳論」と銘うったものの芭蕉は、一冊の俳論書も書き残してはいない。句作者の心構えとか、句をつくる際の精神構造化なるものを解説していったら俳諧の生命である新しみが得られなくなってしまうことは、芭蕉自身が一番よく知っていたはずである。

それでも折にふれ不易流行とは、いかなるものかを説いた。土芳や去来の俳論書を見ることによって、又芭蕉自身の書いたものの中から、書簡の中から、さらに彼の作風の変遷、つまり芸境の変遷をみるにより推察出来る。貞門から談林へ、さらに蕉風へ、又その中でも『冬の日』の風狂の世界から「猿蓑」の、わび・さび・しをりの世界へと展開していった。そして最後に『炭俵』において、かみみの境地を説くに至る。芭蕉にとつて俳諧とは、おかしみの表現ではなくて自らの魂の感動の表現であった。芭蕉は、自然を人間と対立するものとしてではなく、人間と調和するものとしてとらえた。そして自然と融合することにより、具体的には旅を続けることによって自己変革を試みた。近世という時代の中で一所不住の生涯をおくった芭蕉は、庶民層の中に真実を窺見し、美をみいだしたのである。

私の中で、涸れたイメージでしかなかった芭蕉像に、どれだけ血をかよわせ得たか。資料を読解することにおいて、何度も消化不良をおこしたりして、その点については心もとないが、卒論を書き終えることによって、又ゼミ旅行をすることによって私のイメージの中でいくらかは、生き生きとした芭蕉像になったような気がする。

四泊五日の予定で伊賀上野をふりだしに、芭蕉記念館で館長さん自らの説明をうけたこと、石山寺の近くの宿で、八人で歌仙をまいたこと、みの虫庵での老婆の呪文を唱えるような調子の説明を聞いたこと等は、いまだに忘れられない。幻住庵跡を訪れた時など、蚊が多くて困ったが、石碑に書いてある芭蕉の句を読まなくては、ここを動かない等と先生に言われ、皆が足踏みをしながらどうにか読んだ記憶も懐しい。

ゼミでの出会いに、ことよせて名称を「連衆会」とし、毎年十月十日に会合をもっている。そして、みかん狩りに行ったり、食事をしたりしてお互いの人間としての変遷の過程を確かめあっている。これを書いてる最中に悲しい知らせを受けた。かねて病氣療養中であった、ゼミの仲間の鈴木ふみ子さんの訃報である。謹んで哀悼の意を表したいと思う。

△王朝の音楽▽

——源氏物語と枕草子をめぐって——

第四回卒業 稲葉 優子

大学から「卒業論文の思い出」を書くよう依頼をうけ、正直いってとても困ってしまいました。この三月に大学を卒業し、四月から

小学校の教師となり、しかも一年生を教えている私には、まだ一年しかたっていない当時のことが、とても昔のことのような気さえし
ます。

私は、伊藤先生に指導していただき、卒論には、「王朝の音楽」という題名で、源氏物語と枕草子にあらわれた音楽、それと二人の作者の音楽観の相違等について書きました。なるほど、本だなを見ると、当時必死で読んだ源氏物語がずしりと場所を占めており、そのまわりには、参考にした本が並んでいます。これが、卒論を書いた証拠といえ言えるかも知れません。しかし、わずか一年たらずで仕上げた論文に、よいものが書けるはずがなく、自分でも不満ながら提出しようなしいでした。そんな私に、卒論の内容についての思い出がかけるはずがありません。そこで、私が卒論を書いた過程で、よかったなと思ったことがいくつかありますので、それについて書かせていただくことにします。

一つは、卒論を媒介して得た、先生やゼミの友人とのつながりです。私たち伊藤ゼミは、人数も多く、お世辞にもまとまっているとはいえないゼミでしたが、ゼミ旅行には数回行き、その行き先が、いつも鶴原の跡見の寮でした。その旅行の中で、最も記憶に残っているのが、卒論の提出締め切りを間近にひかえて行なった卒論旅行です。これは、私たちの仕上がりがあまりにおそいのを心配して下さった先生が言い出して下さったもので、あの時ばかりは、みんな真剣な面持で、ポストンバックに、本をいっばいつめこみ、原稿用紙持参で参加しました。先生からは、それぞれについて指導していただき、私たちは、改めて先生の博学におどろき、尊敬したのです。私など、和歌のゼミにはいっていながら、すきなことをやら

せていただき心から感謝しております。

この旅行では、もう一つ楽しいことがありました。それは、先生が、さし入れをたくさんもってきて下さって、勉強のあい間に、いただいたことです。今考えると、みんなあんなにがんばったのは、おかしがいただけるのが目的だったのかも（？）知れません。みんなが、一つの目的にむかってがんばっていたせいかこの旅行は、とても有意義なものでした。

卒論を書いてよかったと思うもう一つの話は、一つのを仕上げることができたよろこびです。内容についての不満はありますが、まがりなりにも、一さつの本にできた時のうれしさは、言い表わしたいものでした。書いている時点では、卒論さえなければ、もっと自由に学生生活がおくれるだろうに、と考えていた私ですが、終わった時には、やっぱり書いてよかった、という気持ちに変わっていました。現在、どこにどう役立っているなどということは言えませんが、私の大学時代の大きな思い出の一つには違いありません。

最後になりましたが、国文学科報の創刊をお祝いすると共に、母校の今後の発展を、心からお祈りいたします。

△円地文子の人と作品▽

第四回卒業

生駒 由美

(旧姓 鈴木)

原稿用紙三枚程度で、という注文にどうにもまとまらず四苦八苦した。もう情ない程に書いては捨て書いては捨てているので、サッ